

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 8月 27日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2012

課題番号：20520409

研究課題名（和文）

日本語動詞の形容詞的用法の獲得過程に関する通史的研究

研究課題名（英文）

Diachronic Studies on the Process of Acquisition of Participle in Old Japanese

研究代表者

釘貫 亨 ( KUGINUKI Toru )

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：50153268

研究成果の概要（和文）：本研究は、古代日本語に形態的特徴として表れた動詞派生及びそれに従属した形容詞派生の実態に注目し、特に動詞の形を変えずに形容詞に転用する個性的で重要な用法が奈良時代語に成立したことを明らかにした。それは、「飛ぶ鳥」「咲く花」「荒れたる都」など先行する文脈から相対的に自立して文法項を取ることなしに、あたかも形容詞のように名詞を修飾する一群の表現の存在である。この現象は、従来全く注目されなかった動詞の形容詞への転用例である。

研究成果の概要（英文）：

In Modern Japanese, Verbs have several uses of participle. The Fact suggests the difference between Japanese and European Languages. European Languages have the use of participle (present and past). In the face of those, Japanese participle has TEIRU(present) "ikiteiru akashi 生きている証", TA(past) "ikita kaseki 生きた化石", DAROU (future or conjecture) "ikirudarou kyokun 生きるだろう教訓", RERU, RARERU and BEKI (passivity and duty) "ikasarerubeki keiken 生かされるべき経験" NAI(negative)makenai yakyu 負けない野球, SERU, SASERU(causative)yomaseru bunsyou 読ませる文章, (unmarked)saku hana 咲く花.

.Like this, Japanese use of participle has the various dimensions. Japanese participle system is exceedingly individual. Such an individual character of Japanese participle system has begun from Old Japanese in NARA period 8<sup>th</sup> century. In Old Japanese, there had been several types of participle uses. For example, (unmarked)saku hana 咲く花, tobu tori 飛ぶ鳥 TARI(past)sakitaru hana 咲きたる花, RI (present) sakeru hana 咲ける花 YU, RAYU (passivity) iyu shishi 射ゆ矢, MU (will) semu sube 為むすべ. Participle systems of Old Japanese had much spread out in HEIAN period from 9<sup>th</sup> century to 11<sup>th</sup> century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語学

キーワード：分詞、動詞的形容詞、自他対応、

### 1. 研究開始当初の背景

私は、奈良時代語に観察される動詞の連体修飾構造の統語論的意味と機能に関する研究に蓄積を積んできた。その過程で「長靴を履いた猫」「鉛筆を持つ手」のような先行文脈に文法項を取るものと「荒れた肌」「利いた風なこと」「裏切られた革命」のような文脈から離脱したより形容詞に近い転用法の統語論的相違に関する深い観察の必要性が浮かび上がった。文法項を取る名詞修飾節と文法項を取らない分詞用法は日本語では格助詞標示の有無によって消極的に区別されるが、この別はすでに奈良時代から存在することが判明した。欧語ではこの両者は、関係代名詞が介入する名詞修飾節と現在と過去の分詞用法によって明確に統語論上の区別によって標識される。実は日本語にも分詞と連体修飾節の区別が存在することが本研究によって初めて明らかにされたのであるが、奈良時代から平安時代にかけての古代日本語成立過程の中で動詞の名詞修飾機能の発達過程を観察する学術上の機運が存在した。本研究は、このような研究上の蓄積を踏まえて取り組まれた。

### 2. 研究の目的

前項で述べたように、欧語と同様に日本語において而も古代語成立過程の中で分詞用法が成立してきたことを明らかにすることを目的とした。その実践過程において、古代日本語の分詞用法が、動詞の派生を軸とする動詞増殖過程と密接に関連して発達したことが明らかな形で浮かび上がってきた。本研究は、古代日本語の成立において最大限の貢献を成した動詞増殖との関連から古代日本語の多様で個性的な動詞的形容詞（分詞）の体系を解明することを目的として一定の成果を上げた。

### 3. 研究の方法

本研究の方法論上の特色は、従来から意味分析に偏った文法史研究に対する見直しを進めて形態論的観察を優先させることにある。外形に現れた特徴から観察対象の文法形式を巡る統語論的環境に至るまでの広い観点から統語論的評価を行った。奈良時代語資料として万葉集、平安時代語資料として三代集、またその時期の散文資料としての物語、日記類を渉猟し、動詞、形容詞の派生、再派生の連関を再建し、文脈から離散した分詞用法をできうる限り、採集する徹底した方法を採用した。

### 4. 研究成果

本研究では、8世紀奈良時代語から11世紀平安時代語までを古代日本語として統括する。その理由は、後の時代と断絶して奈

良語と平安語の間には親和性が認められるからである。王朝古典語として了解される平安時代語は、先史以来継続してきた古代日本語形成過程の最終的完成相であると考えられることができる。その中において、古代語形成の中核的原動力として動詞の派生を中心とする増殖過程をとらえる点に本研究の特色がある。動詞は、既存の動詞を資源にして新しい動詞を作ることができる。「住む→住まふ」「取る→とらふ」「語る→語るふ」等であるが、奈良時代語の「動詞→動詞」型の派生は、作用継続性フ語尾動詞を始めいくつかの類型があるが、最も注目される体系的派生現象が自動詞と他動詞の対立が形態上に露見するいわゆる「自他対応」である。自他対応は、第Ⅰ群動詞（活用の種類による）、第Ⅱ群動詞（語尾の違いによる）、第Ⅲ群（語幹増加と語尾）の三種類からなり、基本的に現代日本語にまで継承保存されている。動詞から動詞を生む造語法は、奈良時代語に於いて大いに発達して、今日に及ぶ多くの動詞基本語彙がこの時期に形成された。奈良時代語の終わり頃から、「神・ぶ」「堅・む」のような名詞や「悲し・ぶ」「楽し・む」のような形容詞を語幹にして語尾を接する分析的な動詞群が発達し、これを基本的な造語法とした一連の接尾辞動詞群が平安時代に大量に出現した。接尾辞による動詞は、「野分だつ」「愛敬づく」「呼子鳥めく」「はかながる」など平安王朝文芸を特徴付ける多くの動詞群を造語した。平安時代以後新たに出現発達した多量の接尾辞動詞群は、現代語に継承されるような歴史的耐久力の強い基本語彙が少なく、臨時一語が多かった。この事実は、接尾辞動詞群の相互的形態連関が離散的で脆弱であるが故に歴史的耐久力に乏しかったからである。これに対して奈良時代に形成された動詞から派生した動詞群は、祖型動詞とともに現代語に継承される基本語彙が多く含まれている。この事実は、接尾辞動詞群の造語生産性の強さが極限に達して、古代語の動詞がついに供給過剰の状況に達したことを示すものである。平安時代語が古代日本語形成の完成相であると考えられるのは、このような現実を指している。

上記のような実態は、動詞が動詞を生む現象を捉えたものであるが、動詞が名詞や形容詞を造語することもあった。中でも注目されるのは、動詞からシク活用形容詞を造語する生産的システムの存在である。これは奈良時

代語から機能していた。「巧む→たくまし」「急ぐ→いそがし」「なつく→なつかし」「病む→やまし」などがあるが、従前からシク活用形容詞が情意的意味を持つ点に注目が集まっていたが、その原因については、不明な点があったが、筆者の調査によって、感情的意味を持つ動詞群からまとまってシク活用形容詞語幹に動員された結果によるものであることが明らかになった。動詞を資源にして、形容詞を派生する場合に、なぜ排他的にシク活用形容詞が選択されるのかについては、詳細に判明しているわけではない。ただ、この種の情意的意味を表示するシク活用形容詞群の多くは、今日においてなお継続して使用される基本語彙を多く含んでいる。その理由は、派生元の動詞と派生形容詞が共時態において緊密に形態的連関を持つことと併せて、情意的意味という連関において動詞由来のシク活用形容詞の相互関係が緊密に保持されていたからであると考えられる。この点は、全体として形態的連関に乏しく、単語同士の相互関係が離散的な古代語形容詞の中にあつて非常に特殊な語彙であると言えよう。しかし、古代語形容詞は、形容詞を資源にして形容詞を派生する完結的なシステムを持たなかったことに現れているように、全体として散漫で非体系的な語彙を構成していたので、恒常的な語彙不足に陥っていた。その間隙を埋めるかのように、状態的意味を持つ「遙か」「豊か」等の名詞に加えて格助詞ニに存在動詞アリを接して成立した断定辞ナリが下接して平安時代に成立した形容動詞が出現した。また、同じ頃、形容詞連用形「高く」「暗く」にアリが接して成立したカリ活用形容詞が出現するなど、形容詞の造語に存在動詞が体系的に動員されて形容詞語彙の不足を補った。形容詞は、奈良時代語に於いて動詞と緊密な関係を成立させて、しかも動詞に従属していた。このような動詞と形容詞の形態的親和性は、欧語と比較してきわめて個性的である。

本研究の最大の成果は、従来全く等閑に付されていた動詞の形容視転用例就中分詞用法に着目して、その多様な用法が分詞概念の本場とも言える欧語をしのぐ豊かさをそなえていることを明らかにした点である。現在分詞と過去分詞の二種類から構成される欧語の分詞に対して、「ある人・咲く花（無標識）」を起点として「あるべき姿（当為）・存在するだろう解決策（推量）・負けない野球（否定）・しゃれた関係（過去）・来たるべき破局（未来）・生きている証（現在）・試される提案（受け身）」など、多くの文法的カテゴリーに放射状に展開する多様で複雑な体

系を持つが、その発達の兆候は既に奈良時代語に発していることが判明した。今後は、現代語との対照的観点から、日本語の複雑で個性的な分詞構造の歴史文法学的解明が期待される。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

釘貫亨「形態的特徴から見た古代日本語動詞の増殖過程」『国語国文』（京都大学国語国文学研究室）査読有（2013）1 頁～13 頁

釘貫亨「奈良平安朝文芸における過去辞が介入する分詞用法」『名古屋言語研究』V6 査読有（2012）（名古屋言語研究会）1 頁～11 頁

釘貫亨「本居宣長のテニヲハ学」松沢和宏編『テキストの解釈学』（水声社）（2012）査読無 295 頁～317 頁

釘貫亨「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について」高橋亨編『日本語テキストの歴史的軌跡』（名古屋大学グローバルCOEプログラム第 8 回国際研究集会報告書）（2010）査読無 3 頁～10 頁

釘貫亨『源氏物語』における過去分詞的名詞修飾の一典型』『HERSETEC』VOL2(名古屋大学グローバル COE プログラム論文)（2009）査読無 53 頁～69 頁

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

釘貫亨 (KUGINUKI TORU)  
名古屋大学・文学研究科・教授  
研究者番号：50153268

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし